様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４０３５

研究課題名（和文）グローバル・キャリアの転進：アジア系医療従事者の心の動きとマクロ環境

研究課題名（英文）Global career development: Asian medical workers psychology and macro environments

研究代表者
浅井　亜紀子（Akiko, Asai）

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：１０３６９４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本とインドネシア両政府の経済連携協定により来日し長期滞在するインドネシア人看護師と介護福祉士の日本での定住化プロセスと帰国後のキャリア選択プロセスを検討した。ホスト社会で一時滞在から定住化に向かう場合、主観的ウェルビーイング（Subjective Well-being, SWB, 人生に対する情動的また認知的かつ主観的な評価）の概念は、国際移動した人がホスト国で定住できそうかどうかを予測するめどとして使える。母国とホスト国とを公私の様々な領域で比較・評価することで肯定的・否定的情動の総和の帰結として定住化を選択しているとが考えられる。帰国後のキャリア選択や再入国も、SWBの総和で説明できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本とインドネシア両政府の経済連携協定により来日したインドネシア人看護師と介護福祉士の日本での定住化プロセスと帰国後のキャリア選択プロセスを検討した。ホスト社会で一時滞在から定住化に向かう場合、主観的ウェルビーイング（Subjective Well-being, SWB, 人生に対する情動的また認知的かつ主観的な評価）の概念は、国際移動した人がホスト国で定住できそうかどうかを予測するめどとして使える。母国とホスト国とを公私の様々な領域で比較・評価することで、肯定的・否定的情動の総和の帰結として定住化を選択していると考えられる。帰国後のキャリア選択や再入国も、SWBの総和で説明できる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the process of settlement in Japan during their stay and the returnee’s career development process in their country using cases of Indonesian nurses and care workers who came to Japan through Economic Partnership Agreement program. The concept of subjective well-being (SWB), which is defined as the cognitive and affective evaluation of their lives (Diener, 1984), was useful. SWB can be used as criteria to evaluate whether migrants can be settled in the host society.
It is interpreted that migrants decide whether they continue to live in the host country by comparing and evaluating various SWB in public and private areas of experiences, and they decide settlement or return as a consequence of synthesis of each negative and positive feelings. The Returnees’ career development in their own country can be also explained as a process of decision based on the synthesis of SWB.

研究分野：社会心理学

キーワード：インドネシア人　国際移動　主観的ウェルビーイング　異文化接触　看護師　介護福祉士　経済連携協定

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本とアジアの二国間経済連携協定(EPA)により、インドネシアからは 2008 年より 10 年間に約 600 人の看護師と約 1500 人の介護福祉士候補者が来日している。これまでの研究（H21-23 科研基盤（C)課題番号 21530672、H23-27　挑戦的萌芽研究 課題番号 23653172）より、合格前には、日本語習得、国家試験の勉強に伴うストレスがあった。また、母国では看護師であったが、日本では看護助手の仕事しかできないことから職業アイデンティティショックを経験していた。候補者の EPA 応募動機と施設の EPA 受け入れ理由とのズレが、候補者と施設の双方にストレスを産んでいた。日常的な ICT の更新により、母国にいる家族や日本在住の候補者同士と交信することで、候補者のストレスの緩和がなされていた。また、国家試験の合格率は看護師の場合 10%～20%、介護福祉士は約 50%と難関であるが、ようやく国家試験に合格しても、そのうちの 2 割が帰国、3 年以内に 4 割が帰国してしまう。理由の多くは結婚や親の病気であった。民間も国も総力を挙げて受け入れの人的、経済的な負担をしたが、外国人看護師・介護福祉士の定着は低く、受け入れ側は割に合わなさを感じる。定着を促進する要因は何かを検討する必要がある。また帰国後は、日系企業に勤務する人が多くいることも現地調査からわかっている。しかし、合格後のインドネシア人は、どのような日本体験をし、なぜ帰国し、その後日本体験をどのように生かそうとするのか、十分に明らかになっていない。

２．研究の目的

本研究では、インドネシア人が国家試験合格後は、合格前と比べてどのような体験をするのか、日本に長期滞在するためには、どのような条件が必要なのか定住化の促進要因を検討する。また、合格後は、どのようなキャリアを形成し、日本体験をどのように生かしているのかについて検討する。

３．研究の方法

本研究では、当事者の生きた経験を、彼らの意味付けから読み取る現象学的アプローチをとる。インドネシア人が、日本での体験をどのように認識し、評価し、情動を感じているか、彼らの意味づけを、半構造面接により明らかにする。

面接は、代表者、分担者、協力者が、手分けをして、来日したインドネシア人看護師候補者 61 人、介護福祉士候補者 79 人に聞き取りを行った。

合格後も長期滞在をしている人には、合格前と合格後の仕事内容の変化、給与など雇用条件、職場の対人関係、やりがいや満足、また家族との生活の困難や満足、宗教生活、将来の展望について聞き取りをした。帰国者に対しては、帰国理由、帰国後の職業の選択の経路と理由、現在の仕事の内容、日本語や日本の体験をどのように生かしているか、将来の展望について聞き取った。

４．研究成果

(１)国際移動と主観的ウェルビーイング

本研究を進める中で、定住化への条件を理論化していく上で、主観的ウェルビーイング（subjective well-being，以下 SWB）が重要であることがわかった。これまでの異文化接触研究においては、新しい環境で直面するストレスやショックなど否定的情動を、ストレス―対処―適応の枠組みから研究されることが多かった（Berry，1994)。この枠組みは、移動直後から２～４年の状況を捉えるには有用であるが、滞在が長期化し、異文化での生活環境から喜びや満足などの肯定的情動を多く経験し、住むならホスト社会と考え始める人々に適用するのは難しい（浅井・箕浦，2018；Psoino，2007)。SWB は、「人生に対する情動的・認知的また主観的な評価である」と定義されており、３つの要素①肯定的情動、②人生の満足感と、③否定的情動の不在、からなっている（Andrews &Withey，1976: Diener，1984)。我々は、SWB の概念を使って、滞在が 7 年以上の事例を中心に、定住化プロセスを理論化することを試みた。肯定的情動と否定的情動を含む SWB の概念は、その両方を含む異文化体験に応用ができる。SWB は、経済などの客観的評価とは区別され、人生に対する主観的な満足を表す概念として Diener（1984＆2000）が提唱したが、先行研究は質問紙による量的研究が主であり、文脈を考慮しない限界が指摘されている（Fozdar & Torezani，2008)。我々は、EPA で来日したインドネシア人が国家試験合格後、７年前後を日本で暮らす中で、SWB をどのように感じ、それらが時間経過と伴にどう変化したかを彼らの語りから解釈し、定住化志向との関係を検討した。

（２）インドネシア人の長期滞在者の SWB

定住化には、ホスト国での経験領域（「仕事」、「言語」、「私的生活」、「精神的生活」）における情動体験の総和が SWB に関係していた。ホスト社会での経験は、主体がどのように意味づけるかによって、否定的にも肯定的にも感じられるが、異文化暮らしの人の場合、意味付けは、母国との比較でなされる。これらの項目ごとの相対的な SWB の総和が「総合的な SWB」で、これがプラスの場合にはホスト社会での滞在が長期化し、マイナスの場合は帰国志向が強まる。

看護師の場合は合格後 5，6 年後には、看護知識やスキル、職場の日本語や報連相などのコミュニケーションの取り方、記録の書き方など職場で十全の機能を果たすことができる。中にはリーダーとして、日本人や EPA の後輩の指導にあたる者も出、大変ではあるがやりがいも感じ

ている。介護福祉士の場合も、合格後 5 年もたつとキャリアラダー（介護主任、次長、施設長）の最下位管理職に任じられ新人 EPA の指導にあたる者もでる。

合格後は正規の看護師となり 5～6 万円給料が上がるので生活には余裕ができる。しかし、介護福祉士の場合は、合格しても給料の上昇は 5 千円～1 万円程度なので、家族が来ると生活にさほどの余裕はない。特に住居費の高い都市住まいの介護福祉士の生活は厳しい。しかしインドネシアの給与水準との比較で、経済的満足からくる SWB のプラスは、定住化を促す大きな要因であった。日本に永住を希望しているから永住権を申請するのではなく、家族員ごとに異なるビザ更新の煩わしさを避け、配偶者の就労制限を免れるためになされていた。

合格後多くの人は結婚して日本で子どもを育てはじめ、＜私的生活＞領域における SWB の構造は独身時代と大きく変わってくる。滞在の長期化とともに、子どもの母語や母国文化継承をどう維持するかが問題となる。宗教心の強いイスラム教徒は、自身の宗教実践の継続と同様に子どもへの宗教教育が重要で、宗教に関しては日本よりインドネシアの方が良いと感じている。母国の家族が健康で老親の近くに兄弟がいる時は、SWB が高い状態で日本に滞在できるが、母国の家族の病気は、SWB を低下させ、帰国の決断を促す要因となる。

(３)候補者時代のストレスと SWB：入国直後から国家試験合格までは、ストレス・コーピングモデルで説明可能だが、SWB を使っても説明できる。来日当初の日本語学習、日本語での国家試験勉強に対し、難しさやストレスの大きさが多く語られ、否定的情動が強かった。仕事領域では、インドネシアの資格は評価されず、看護師候補者は看護助手の仕事しかできず職業アイデンティティショックが強く、看護師資格をもつ介護福祉士もそれを生かすことが出来ず否定的な感情を抱くも、それが日本の制度であることを了解し、感情を調整して、合格を第一に考えることで困難に立ち向かう力を得る。こうしたストレスや仕事への否定的情動は、職場のサポート体制、日本人スタッフとの関係性、EPA 仲間との交流などによって緩和されていた。また、あまたのストレスや困難があったとしても、インドネシアに比べて 6～8 倍の給与を得ていることや、とくに母国家族への経済支援をしているという満足感が大きかった。したがって、SWB の総和はストレスの大きさを差し引いてもプラスとなる場合は日本での継続就労とそれを可能にする国家試験合格に向けての受験志向を強めていた。

(４)帰国者のキャリア形成とＳＷＢ

３年の滞在期限内に国家試験に合格できずに看護師候補者が帰国し始めたのが 2011 年 4 月、滞在期限 4 年の介護福祉士候補者の帰国も 2012 年に始まり、著者らの追跡調査でインドネシアを訪問した 2017 年には、EPA 特別活動で「雇用契約終了」した看護師は 442 人（うち合格者 50 人）、介護福祉士は 702 人（うち合格者 213 人）となっていた（JICWELS, 2018）。702 人には特別活動以外の在留資格者を保持して日本に滞在している人も含まれるため、帰国者は若干少なくなるものの、そのうちの 45 人に面接することができた。そのうち 27 人が元看護師候補者(元看護師と記述)、18 人が元介護福祉士候補者(元介護士と記述)である（表 1 を参照）。

表 1 元看護師・介護福祉士候補者の帰国後の就職先：帰国直後

帰国直後の職業		看護師・助産師					会社員・教員			大学院	司書・事務	商売	専業主婦	合計
		イ病院	イ大学	イ助産所	日系クリニック（保健室）	高齢者施設	日系	外資系	日本語学校					
帰国直後		10	1	1	4	1	10	2	2	3	3	5	3	45
EPA職種	元看護師	9	1	0	4	1	4	2	0	2	0	2	2	27
	元介護士	1	0	1	0	0	6	0	2	1	3	3	1	18
国家試験	合格	0	1	1	2	0	5	0	0	1	1	4	3	18
	不合格	10	0	0	2	1	5	2	2	2	2	1	0	27
性別	男性	4	0	0	1	0	4	1	1	1	1	0	0	13
	女性	6	1	1	3	1	6	1	1	2	2	5	3	32
地域	ジャカルタ大首都圏	8	0	1	3	1	10	1	1	3	3	4	3	38
	ジャカルタ大首都圏外	2	1	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	7
合計		17					14			3	3	5	3	45

帰国者 45 人の国家試験の合否、性別、地域別の職業選択の内訳を示す。なお地域別の項目ジャカルタ大首都圏には、ジャカルタと西ジャワ州のブカシ、ボゴール、デポック、バンテン州のタンゲランを含める。国家試験に合格したにもかかわらず帰国したのは 18 人(看 10 人、介８人)、不合格で帰国した者は 27 人である。

帰国者には大きく分けて３つのキャリア選択があった。インドネシアで得た看護師・助産師の資格を生かす場合、日本で得た知識やスキル（日本語や介護の専門知識）を生かす場合、それ以外の第三の道である。しかしながら、帰国直後の職業をずっと維持するわけでなく、3～5 年以内に転職する者も多く、全体の 24.4%にあたる 10 人で、2 回以上転職する人もいた。転職後、全体として、看護師資格を生かしている者が減り、日本語を生かしている者が増えている。

インドネシア病院で看護師をしていた10人うち1人は日系企業に、1人は高齢者施設に、1人は日本へ再入国した。日系企業への就職者は10人から15人と5人増えた。
①インドネシアで得た看護師資格を生かす人たちに共通しているのは、看護・医療へのこだわりが強く、人へのケアや看護にやりがいを見出している点が共通している。看護師の賃金の低さに関らず、看護師職・助産師を選んだ帰国者は、看護師職への思い入れが強い。看護師職を自分の天性の資質として意味づける場合〈天職としての仕事〉と家族、とくに親の健康を守る職業として捉える場合があった〈家族のための仕事〉である。いずれも看護師職を選ぶことで、仕事のやりがいを高めSWBを上げていた。しかし、看護師職を選ぶときに〈ブランクによる看護技術の低下〉を克服する必要があり、〈本人の気力と努力〉、また、先輩の助けや同僚の見守りを含む〈職場の人間関係の助け〉によって看護技術を取り戻し、自信を回復させていた。帰国者が日本で習得した〈日本の看護や介護技術・知識〉には、高齢者のケア技術、リハビリテーションの知識、また、チームワーク治療のあり方であった。これらの知識をインドネシアの病院で適用できるわけではないが、個別に評価されることがあった。インドネシアの病院はEPA経験を公的に評価する制度がなく、看護師としてはゼロに戻って最初から始めなければならず、海外体験をどう評価するかは今後の課題である。
看護師資格を日系企業で生かしている人の場合、看護医療の知識と日本語力の両方を生かしていた。とくに日系企業の医療サービスや医療関連の企業で生かす帰国者の場合、日本人の期待する看護・医療の知識を生かすことを重視され、国家試験合格者で正規の看護師・介護福祉士とし従事した経験がある者がほとんどである。日本の医療の水準、日本人の期待がわかる人々として日系企業側の期待も高い。帰国者は、日本で時間厳守やスケジュール管理、ダブルチェックなど職務規律を学んだことが、職場からの評価につながり、自己効力感を高めていた。特に合格した帰国者は、日本で「命を守る現場」として病院や高齢者施設の厳しい職場を経験した。これらの高い職務規律は日系企業や日本人を顧客とする仕事においては必須であり、帰国者はそれらを習得した者として企業側に期待され、彼らのキャリアにおける自己の再編過程の重要な要素として、SWBを高めている。
EPA参加で学んだ＜日本語力の活用＞は、帰国者のSWBを高め、キャリア選択に影響を与えている。看護師資格を生かす者の中で、最も日本語力を活用しているのは、日系企業に勤めている者たちである。
②日本で学んだ介護の専門知識はどのように生かされているのか。インドネシアにおいては、EPA開始時2008年においては、高齢者ケアは伝統的に家族が行っていた。インドネシアの約9割を占めるイスラム教のコーランには、子の親への孝行、とくに子どもが老親の面倒をみることが責務とされている。地域の老人ホームは、身寄りのない高齢者や障害を持つ高齢者を対象としており、宗教団体が多い。しかし、近年、中高所得層を対象とした高齢者施設の事業が、民間によって進められてきている。元介護士たちは、帰国後、介護の専門知識や技術を、a.日系や外資を中心に徐々に増えてきた介護士養成の教員や高齢者事業で生かす場合、b.非介護領域の企業で介護技術を応用して生かす場合、そして、c.親などの家族のケアで生かす場合の3とおりが見られた。a.の職業で生かしている事例は2人と少ないが、看護学校や介護士コースで介護の専門知識を教え、将来介護士養成学校を作る準備をしている者もいた。b.介護以外の職業に応用して生かしている者も1事例ではあるが、介護のボディメカニズムを、日系製造業で荷物運ぶ若い現地の従業員に教え、彼らの腰痛を予防した。介護技術を自分の身近な職場で生かすことができることで、仕事領域のSWBを高めている。しかし、a.やb.のように職業に生かす事例は少なく、ほとんどがc.の家族生活の中で親のケアに生かし、そのことに満足を感じていた。
③第三の道は、看護師資格や日本で学んだ資格を生かすのではなく、大学院進学者、商売、司書・事務、専業主婦を選んだ人々で、このカテゴリーにはいる帰国者は約3分の1の15人である。大学院進学は、専門職のキャリアを築くためのステップアップを図る道である。国家試験が不合格になったショックを感じ、プライドを取り戻すために大学院に行くケース、また日本の経験から医療看護の制度に深い関心をもち大学院に進学したケースなどがある。大学院進学者3人のうち、2人は看護大学の教師に、1人は日本に再入国した。商売を選ぶものは,看護師や助産師資格を持っていても、生かすことができない状況がある。女性の場合,育児と看護師職の両立困難、看護師・助産師技術の低さや看護師職の給与の低さから、商売を選んでいる。日本に再入国するものもいる。EPAで日本にいる間にインドネシアの経済状況も大きく変化した。物価の上昇に伴わない給与の上昇の低さなどインドネシア雇用環境への不満、インドネシアの職場や学業における自己効力感の低さが再入国行きを促していた。また、母国への看護職にこだわらない柔軟性、自立と自由の希求、両親を近くでみるきょうだいの存在も、再入国を可能にする要因であった。いったん結婚や家族を理由に帰国した者も、家族の状況が落ち着くと、再来日するケースが今後も増えていくと考えられる。

(5)成果の国内外における位置づけ
当初、研究を始めたときには、主観的ウェルビーイング(SWB)を軸におくという発想はなかったが、当該研究で、定住化を促進する要因を検討するときに、肯定的情動と否定的情動の両方を含めた主観的ウェルビーイングの概念が有効ではないかという示唆を得た。異文化接触研究

を SWB の切り口から従来の質問紙による量的研究ではなく質的に研究をする可能性を見出した。また同概念は、外国人をいつまでも異なる者として位置付けるのではなく、日本人と同じ生活者として社会への統合を考える枠組みを提供する。今後の外国人労働者の受入れ拡大にあたり、彼らの仕事や生活領域での総合的な SWB を向上させていく視点から、政策を考えていく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4　件）

1. 浅井亜紀子, 職業アイデンティティのショックと対処方略: 来日インドネシア人看護師候補者の自己をめぐる意味の再編過程, 質的心理学研究, 査読有, vol. 17, 2018, pp. 185-204.
2. 浅井亜紀子・箕浦康子, インドネシア人看護師家族の日本滞在の長期化と主観的ウェルビーイング―職場、学校、地域との関わりでの情動体験―, 桜美林論考言語文化研究, 査読有, vol.9, 2018, pp. 61 -82.
3. 浅井亜紀子・宮本節子, 技術移転によるインドネシア人帰国者の心理と介護業界へのインパクト：経済連携協定医療人材受け入れプログラムを事例として,桜美林論考言語文化研究, 査読有, vol.8, 2017, pp.87-105.
4. 宮本節子・浅井亜紀子　ICT 技術がもたらす外国人医療従事者の意識の変容，地域ケアリング，vol.8，No.6,2016，84-86.

〔学会発表〕（計　12　件）

1. 箕浦康子・浅井亜紀子，異文化での定住に向けて：その実態と関与因　－EPA 看護師候補者として来日したインドネシア人の場合，異文化間教育学会第 39 回大会(新潟大学)，2018 年 6 月.
2. 浅井亜紀子・箕浦康子，異文化体験と帰国後のキャリア　―元 EPA 看護師候補者として来日したインドネシア人の場合―，異文化間教育学会第 39 回大会(新潟大学)，2018 年 6 月.
3. 箕浦康子・浅井亜紀子，異文化での定住に向けて：その実態と関与因―EPA 介護福祉士候補者として来日したインドネシア人の場合―，日本社会心理学会第58回年次大会（広島大学），2017 年 10 月.
4. 浅井亜紀子・箕浦康子，異文化体験と帰国後のキャリア　―元 EPA 介護福祉士候補者として来日したインドネシア人の場合―，日本社会心理学会第58回　年次大会（広島大学），2017 年 10 月.
5. 宮本節子・浅井亜紀子，インドネシア人女性のキャリア展開：日本定住を可能にする要因，異文化コミュニケーション学会第 32 回年次大会（上智大学），　2017 年 10 月.
6. Akiko Asai, How to Cope with Threat to One’s Occupational Identity: Psychological Reorganization Processes of Meanings Related to Self among Indonesian Nurse Candidates in Japan, International Academy for Intercultural Research, 10th Biennial Congress of the Staten Island, June, 2017.
7. 浅井亜紀子・モハメド ユスプ，日本の看護師国家試験合格後のインドネシア人看護師の職場と家族の課題，異文化コミュニケーション学会 5 月例会（青山学院大学），2017 年 5 月.
8. Akiko Asai & Setsuko Miyamoto, Feeling betrayed: Why Asian care workers leave

Japan's nursing facilities, SIETAR USA 11th Annual Conference, Tulsa, Oklahoma, USA, November, 2016.

9. **浅井亜紀子・宮本節子，インドネシア人医療人材の介護技術の国際移転：現地報告，異文化コミュニケーション学会第 31 回年次大会(名古屋外国語大学)，2016 年 9 月.**
10. **浅井亜紀子・宮本節子，**外国人医療人材のプロティアン･キャリア形成：研修終了後のマイクロ･メゾ･マクロ要因を中心に，**異文化間理解教育学会第 37 回年次大会（桜美林大学），2016 年 6 月.**
11. **浅井亜紀子・箕浦康子，異文化間研究における政策と個人 ―IJEPA と JET の比較を通して―，異文化間教育学会第** 36 **回年次大会(千葉大学)**, 2015 **年** 6 **月**.
12. Akiko Asai & Setsuko Miyamoto, Reentry Processes Reconsidered: How IJEPA Indonesian Nurses Reconstructed their Career in Indonesia? AFS-AAA-SIETAR 2015 Conference, Mercure Resort Sanur, Bali, Indonesia, April, 2015.

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：　宮本節子

ローマ字氏名：　Setsuko Miyamoto

所属研究機関名：　兵庫県立大学

部局名：　環境人間学部

職名：　教授

研究者番号（8 桁）：60305688

(2)研究協力者

研究協力者氏名：　箕浦康子

ローマ字氏名：　Yasuko Minoura